

英 文 学 に デ コ ピ ン



阿部公彦

2 女難と日陰——トマス・ハーディ

トマス・ハーディは昔から日本でも大人気の作家だ。代表作『テス』には、実に14種類もの翻訳がある。たしかにハーディの作品は、節操ないくらいおもしろい。『テス』など、え！え！という展開の連続で、焦らしもたっぶり。勝負どころではグロテスクな場面をつきつける。終わり近くの“天井の染み”など一度読んだら絶対忘れられない。

しかし、ハーディのらしさがほんとに出てくるのは悪名高い最後の作品『日陰者ジュード』かもしれない。読者をあっちこちに連れ回す展開はやり過ぎなほどで、そんな小説家の企みが、いわゆる“境界型”を思わせるスーの性格に結実している。スーは主人公でもないのに、小説中では一番目立つ人物だ（記念写真になるといつの間にか真ん中にいるタイプ）。今「あっち」と言ったかと思うと次には「こっち」と言う人で、実に気まぐれ。男性への依存性が強いわりに中途半端に潔癖なところがあり、それが話をややこしくする。主人公のジュードはお人好しだからこの“境界型”の格好の餌食となり、どんどん身を落としてついには病気になる。

ハーディの登場人物は皆重いものを背負う。象徴の種もいろいろある。ただ、何しろストーリーがおもしろすぎ、神経にさざ波が立ちっぱなしのまま。じわっと感動する暇がない。そこがハーディの長所でもあり短所でもある。『ジュード』でもっとも強烈なのは、最初の妻アラベラがらみの場面だろう。はすばで育ちの悪い、いつの間にかぐんぐん太っていくアラベラ。ジュードとの結婚が破綻するきっかけの一つは、ジュードが食用の豚もろくに殺せないことだった。可哀想だからひと思いに、などと言うジュードに「少しずつじっくり死なせないと肉に血が残るじゃないか！ 売り物にならないだろ、バカ！」的なことを言って叱咤する。のたうち回って苦しむ豚のど笛を平然と掻き切っておとなしくさせるのもアラベラだ。ああ、恐ろしい。ジュードの人生の先行きが暗示される。日陰者というより、女難の人。ハーディが書きたかったのは、結局はそんな「難」を生む女たちだったのかもしれない。

(英文学者)